

聖書: 第一列王記9章15～28節

説教: 城壁を築き直す

はじめに

ソロモンは、隣の国ツロの王であったヒラムの支援を受けながら神殿と宮の建設に着手し、二十年の歳月をかけてそれらを完成させました。そればかりでなく、今日の箇所を見ても分かるように、軍事的にも、経済的にも、また外交関係においても順調な発展をソロモンは成し遂げていきます。周りの国々からは、イスラエルは右肩上がりの成長が著しく、飛ぶ鳥も落とす勢いをもっているように見えたでしょう。

今日の箇所には、ソロモンが行った事業の数々が事細かに報告されています。多くは信仰とは関係のない細々とした事業報告ばかりで、信仰に関することと言えば祭壇の上でいけにえをささげたことがあるだけです。退屈に思ったかもしれません。いったいどこに救いの恵みがあるのか。そのことを見て参ります。

## 1 軍事、経済、外交

### 1) 要塞 (ハツォル、メギド、ゲゼル、下ベテ・ホロン)

ここにはたくさんの町の名前が挙げられております。どの町がどこにあったのか、今は分からなくなっているものもありますが、ハツォル、メギド、ゲゼル、下ベテ・ホロンなどは場所が特定されています。調べてみると、エルサレムを中心にしてイスラエルのあちこちに散らばっていて、いずれも軍事的な重要拠点、要塞となっています。武器を蓄えておく倉庫をつくり、戦車を製造し、保管しておく町も造りました。イスラエルの国は神が建ててくださった国だから、神が守ってくださる。だから軍隊はいらない、ではなかった。ソロモンは平和な時であっても万が一に備えてこのような施設を整えました。

### 2) 港 (エツヨン・ゲベル)

前後してしまいましたが次に26節を見ます。そこにエツヨン・ゲベルという名前があります。シナイ半島の東側、紅海に面したところにある、今はアカバ湾と呼ばれるところにあった港町です。ツロの王ヒラムとの共同事業という形で船を造り、船を操縦する人たちも集めます。この船を使って海外からどんどん金を輸入し、ソロモン王の所に運びます。

これだけ見ても、ソロモンの時代、イスラエルが経済的に潤っていたことがわかります。

### 3) ファラオの娘

次に16節を読みます。「かつてエジプトの王ファラオは、上って来てゲゼルを攻め取り、これを火で焼き、この町に住んでいたカナン人を殺して、ソロモンの妻である自分の娘に決この贈り物としてこの町を与えた。」そして24節。「ファロの娘が、ダビデの町から、ソロモンが彼女のために建てた家に上って来たとき、ソロモンはミロを建てた。」

イスラエルにとってエジプトとえば、かつて自分たちの先祖が奴隷して働かされ、辛い思いをしてきた国です。それが今、ファラオのほうから一つの町を嫁入り道具につけて娘を嫁として送ってくるようになった。なぜそうするか。日本の戦国時代にも、隣の国との戦争を避けるために、相手の国から妻や嫁を迎える、身内の者を人質として差し出すという習慣がありましたが、ソロモンの時代も同じことをしている。それだけイスラエルが力をつけてきたという証拠です。

## 2 ソロモンの信仰

### 1) 一年に三度いけにえ献げた

このようにファラオからも一目置かれるほど、ソロモンは軍事的にも経済的にもまた政治的にも成功をおさめていきます。では、信仰のほうはどうであったか。このことも聖書は記しています。25節。「ソロモンは、主のために築いた祭壇の上に、一年に三度、全焼のささげ物と交わりのいけにえを献げ、それらとともに主の前で香をたいた。彼は神殿を完成させた。」

一年に三度というのは、イスラエルで大切に守られていた過越の祭り、仮庵の祭り、収穫の祭りに合わせてということのようです。神殿を完成させて終わりではなく、その神殿できちんとささげ物を献げていった。ソロモンの信仰は一つも隙がなく、揺るぎないもののように見えます。

### 2) ミロとエルサレムの城壁を築き直す

そればかりではありません。ソロモンの信仰を証しするもう一つの出来事があります。15節。「ソロモン王は役務者を徴用して次のような事業をした。彼は主の宮と自分の宮殿、ミロとエルサレムの城壁、ハツォルとメギドとゲゼルを築き直した。」

ハツォルとメギド、およびゲゼルについては先ほど触れました。それらの町の名前の中にあつて、「ミロとエルサレムの城壁」と書かれているところに注目します。そのミロのことについて調べると、第二サムエル記5章9節にはこう書かれています。「ダビデは要害に住み、これを「ダビデの町」と呼んだ。ダビデはその周りに城壁を、ミロから一周するまで築いた。」

ダビデの町はソロモンが建てた宮のすぐ南の地域にあります（週報に地図を掲載）。この地図を見て分かるように、ソロモンはダビデが築いた城壁を北側に延長し、宮を城壁の内側にくるにように囲ったようです。そしてまたミロについては11章27節後半にこうあります。「ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。」

こうして見ると、ソロモンは軍事、経済、政治そして信仰の面に至るまですべて完璧にそのなすべきことを主の前に忠実に行っていたように見えます。でも本当にそうだったのか。ソロモンが死んでわずか三十年後にイスラエルは北と南に分裂し、北も南もやがて滅ぼされていきます。ソロモンが主に従わなかったからだとして聖書は書いています。いったいどこで彼は道を踏み外したのでしょうか。

### 3) 目に見える破れ口はふさいだが

ヒントは先ほど読んだ11章27節前半にあります。「彼が王に反逆するようになった事情はこうである。」その直後に、「ソロモンはミロを建て、彼の父ダビデの町の破れ口をふさいでいた。」と続く。反逆するようになる彼というのは、ソロモンが非常に信頼していた部下であったヤロブアムのことを指します。そのヤロブアムがやがてソロモンに反逆していく。そのこととミロのことがまるで関係があるかのように同じ節に書かれていて、不思議に感じます。

こう考えてみてはどうでしょうか。ソロモンはダビデの町の破れ口をふさぎ、主の宮を守るようにして城壁を築き直していきました。あたかも、ソロモンの信仰にはどこから見ても破れ口はなく、たとえ罪が攻めてきても守りは堅く、崩されることはない。人の目から見るならソロモンのなすことすべてを主が祝福し、どこにも隙がない。そのように見えました。

しかし主の目にはどう映っていたか。すでにソロモンには大きな隙があつた。肉の目には破れ口を塞ぎ、城壁を築いたかもしれないけれど、霊的な

目で見るとならソロモンには破れ口があちらこちらにあつて隙だらけだつた。

### 4) 目に見えない破れ口が残っていた

いったいどこに破れ口があつたのか。もう一度注意深く聖書を観察します。24節。「ファラオの娘が、ダビデの町から、ソロモンが彼女のために建てた家に上って来たとき、ソロモンはミロを建てた。」ふさいだつたミロ、まさにそこに破れ口がありました。後に11章2節ではっきりとしていきます。「(ファラオの娘を含む) この女たちは、主がかつてイスラエル人に、「あなたがたは彼らの中に入つてはならない。彼らをあなたがたの中に入れてもいけない。さもないと、彼らは必ずあなたがたの心を転じて彼らの神々に従わせる」と言われた、その国々者であつた。しかし、ソロモンは彼女たちを愛して離れなかつた。」

これがソロモンの弱さでした。世に並ぶものがないほどの神から知恵をいただいたソロモンは、主からの度重なる警告を無視し、妻たちが信じていたほかの神々を拝むようになっていきました。

信仰をもっていた人がそんなことをするのかと疑問に思うのでしょうか。信じれば罪から離れることができる、と単純に考えていたのなら、罪の力を小さく見積もっています。罪は私たちの想像をはるかに超える力をもって私たちを誘惑し、墮落させていきます。ソロモンでさえ、それに勝てなかつた。城壁をめぐるし、破れ口をふさいだつたけれど、自分に向かつてくる罪の誘惑を防ぐにはまったく無力でした。

### 3 城壁を築き破れ口をふさぐ方

私たちはソロモンのことから何を学ぶのでしょうか。二つのことが言えると思います。目に見えるもの、例えば城壁であろうが、戦車であろうが、要塞であろうが、目に見える神殿でさえも、罪を防ぐためにはなんの力にもならない。全く無力である。

イエスの時代もそうでした。パリサイ人や律法学者たちは、紫色の衣で着飾って立派な身なりをしていました。人々が行き交う往来に立ち、ながながと人に聞こえるように大声で祈りました。それが信仰深さを表すものであり、罪から離れて神に近づく方法であると信じていました。しかしイエスは言われました。「あなたがたは白く塗った墓である。外側は立派だが、内側には腐った骨が埋まっている。」目で見えるものがどんなにすばらしく見えても、何の意味もない。

ではどうしたらよいのでしょうか。それがソロモンのことから学ぶ二つ目のことです。結局、私たちはどこを見なければならぬのか。外側ではない。内側です。誰の内側か。ほかの人のことか。いいえ、自分自身の内側です。自分自身の内側を見るしかありません。そこに何が見えますか。何も見えないと言いますか。そんなはずはないでしょう。破れ口があちらこちらに開いていて、その破れ口から罪が次々と入り込んでくる。破れ口をふさごうとして何度も努力したかもしれませんが。完全にふさいだと安心したかも知れない。ところがそこが破られて、また罪が入り込んでくる。その繰り返し。そんな経験をしていたのではないですか。いったいどうしたらよいのか。主はこう言われました。「もしわたしの掟を守らずに、行ってほかの神々に仕え、それを拝むなら、わたしは彼らに与えた地の面からイスラエルを断ち切り、わたしがわたしの名のために聖別した宮をわたしの前から投げ捨てる。」(9章6, 7節)

宮が崩されていく。それは建物の宮のことばかりでなく、主イエス・キリストのからだのことを指すのだということは主ご自身が教えておられます。その主が十字架におかかりになり、死んでくださったのは、ほかでもない、この私が主の命令を守らずほかの神々を拝んだからです。

「聖別した宮をわたしの前から投げ捨てる。」非常に厳しいことばに聞こえました。けれどもこのことばが実は主の十字架を意味していたことがわかったとき、これは恵みのことばだとわかりました。断ち切られなければならなかったのは私たちでした。ところが、御子が断ち切られていく。その御子を信じる時何が起こるのでしょうか。主ご自身があなたの破れ口に立ちます。主ご自身が城壁を築き直してくださいます。主ご自身が罪との戦いの最前線に立たれ、すべての責任をこの方が取ってください。

では、私たちは何をすればよいのか。何しなくてよい、と言っているのではありません。罪を差し出すのです。主が折角罪の責任を引き受けると言われるのですから、私たちは喜んでこの方に罪を差し出してあげばよい。主が破れ口に立ってください。この恵みを覚えたいと願います。